



北方民族博物館だより

No.133



E170 食事用木皿 サハリンアイヌ 長さ23.7cm x 幅 16.7cm x 高さ 1.8cm
 収集地：樺太（サハリン）、1938年収集

食事を盛りつける盆・木皿である。サハリンアイヌ語でニイタ（ni-ta）と記録されている。ホウノキで出来ており、長方形の四隅が切り落とされて曲線となっている。盛り付けのために5mm程度の緩やかな窪みが作られて、左右の取っ手部分に彫刻が施されている。

ロシア・サンクトペテルブルクのロシア人類学・民族学博物館には、サハリン東海岸の白浦（現ヴズモーリエ）、小田寒（現フィルソヴォ）、相浜（現ソヴィエツコエ）などで収集された同様の木皿が所蔵されている。

目次 Contents

- 1 表紙 食事用木皿
- 2 講座「オホーツク人と動物の関係」
 ／講座「北米先住民の宝物」
- 3 館長講座「人のなまえ・トナカイのなまえ」
 ／講座「文化人類学における写真—チュコトカの資料より」
- 4 INFORMATION

講座

オホーツク人と動物の関係： ヒグマとアホウドリを中心に

2024.5.18(土) 10:00-11:30

講師：江田真毅氏（北海道大学総合博物館教授）

オホーツク文化は講師のお話では5世紀から13世紀までオホーツク海の南岸沿いに栄えた文化であり、その文化の担い手がオホーツク人です。本講座では礼文島のオホーツク人の遺跡から出土した動物の骨の分析からオホーツク人が動物とどのように関係したのかを動物考古学の見地からお話いただきました。動物考古学とは、遺跡から出土した動物の骨から過去の人々の生活を復元する学問のことで、講師はこの分野の第一線で活躍されています。

礼文島の香深井1遺跡から出土した動物の骨を分析すると、ヒグマもアホウドリも主食とするほどの量の骨は発見されず、オホーツク人の安定したカロリー源は海獣や魚類だったことが推測されます。

ヒグマについては、幼獣は秋に、成獣は春に死亡したものだということがわかりました。また、道南に生息した系統のヒグマの骨も持ち込まれていて、頭骨に孔を開けて、その頭骨を住居に置いたようです。オホーツク人には、春に成獣を屠り、幼獣は捕獲後に飼育して秋に屠るという儀礼があったのかもしれません。つまり熊の幼獣を春に捕獲して育て、その熊の霊を天界に送り返すというアイヌなどの熊送り儀礼の原型をおこなっていた可能性があると考えられます。

一方、アホウドリの骨については、礼文島の浜中2遺跡などで大量に見つかっています。アホウドリの捕獲の目的は肉のほか、骨角器の材料、風切羽根の確保が挙げられます。しかし、メスや雛の骨がないことから、礼文島周辺には繁殖地はなかったと考えられます。アホウドリは繁殖地以外の陸上には留まらないため、洋上で捕獲していたようです。また、頭骨だけは見つかりません。アイヌが沖漁の神としていたのがアホウドリですが、オホーツク人もアホウドリを信仰の対象としていたのかもしれません。

開催当日は国際博物館会議(ICOM)が制定する「国際博物館の日」で、同記念日のイベントとして相応しい講座となりました。

(学芸グループ 宮川 琢)



登壇前の江田講師

講座

北米先住民の宝物

2024.3.16(土) 10:00-11:30

講師：野口泰弥（当館学芸員）

北米太平洋沿岸に暮らす北西海岸先住民の間では、独特の形状をした「銅板」が、最も価値の高い宝物として知られています。この銅板の起源や、形状の意味は未だ謎に包まれています。銅板は「ポトラッチ」という総称で知られる、主催者から招待客への財の分配を伴う様々な儀礼で誇示されたり、分配、破壊されたりしました。



講座の様子

この地域のオーラルヒストリーでは、銅板はアラスカで採取できる高い純度を持つ自然銅で作られていたことが強調されています。しかし、現在までに自然銅で作られた銅板は発見されておらず、各国の博物館に伝わる資料は全て、西欧社会との接触によってもたらされた鑄造銅で作られたことが分かっています。西欧との接触以前に銅板が存在したかは未だ不明ながら、このことは少なくとも接触後に、その使用が拡大したことを示しています。

また銅板の形状については諸説ありますが、人間、あるいは動物の身体を表象しているという説が有力です。例えば銅板には「T字」型の隆線が必ず作られます。この部分を指すのに銅板を用いる殆どの民族においても「骨」に関する語彙が使われています。

クワクワカクウなどの民族の間では、銅板が儀礼的に破壊されます。それは構成員間で競争性のある社会において、高額な宝物を破壊することが、自己の強大な力を示し、ライバルを出し抜く手段の一つであるとして分析されてきました。銅板の破壊にも手順があり、最終的にT字部分だけが残されます。残されたT字の破片はライバルなどに譲渡されます。T字部分をもらった者は、そこに新たな銅片を繋ぎ合わせることで銅板を「再生」させました。

動物が骨から復活するという信念は、北西海岸に限らず北方狩猟民全体に広く流布しています。近年の研究はポトラッチを財の分配を行う単なる経済現象としてではなく、死と再生の観念を背後に持つ、宗教的次元を持つ儀礼であったことを示しています。これらのことから銅板は西欧との接触によってもたらされた鑄造銅という新たな素材を用いつつ、骨からの再生という北西海岸に以前からあったコスモロジーとの混交によって生じた文化であることが示唆されます。

(学芸グループ 野口 泰弥)

館長講座

人のなまえ・トナカイのなまえ： ～名づけに見る北方の死生観・動物資源観

2024.4.27(土)

講師：呉人 恵 (当館館長)

去る4月27日に、年1回の館長講座が開かれました。今回は、北方の先住民の人における名づけ、彼らの家畜であるトナカイの名づけをテーマに、それぞれの名づけの背景にどのような死生観や動物資源観があるのかを館長の専門であるロシア極東に住むコリヤークを中心に探りました。

まず、人の名づけには、北東アジアから北米にいたる環北太平洋域の先住民に共通する特徴がみられます。それは、先祖の名前を新生児につけるという習慣です。コリヤークでは、年配の女性が古い石を使って先祖の名前を言い当て、その名前を新生児につけるとされます。このように先祖の名前を新生児につける習慣は、北米の特に北部でも見られます。このような習慣は、reincarnation、すなわち、人は死んでも再び生まれ変わるのだという再生観念の反映です。

再生観念そのものは、北米からさらには中南米まで広範にみられますが、名づけに反映された例は北米北部に限られているようで、北東アジアの北部から北米北部にわたる重要な地域特徴と考えられるとの指摘がありました。

一方、トナカイの名づけには、トナカイを管理するための適応戦略が見られます。コリヤークのトナカイ牧畜民たちは、橇牽引用のトナカイに個体名をつけます。なかでも注目されるのは、「峠」「平らな山頂」「ハイマツ林」など地名がつけられることです。これらの地名は、たとえば、「かつて峠を越えて荷物を運んでいた」「いなくなったと思ったら、平らな山頂で母トナカイと休んでいた」など、それぞれのトナカイに起こった特徴的な出来事を記憶しておくためのラベルのようなものと考えられます。つまり、トナカイの際立った生態を把握しておくことにより、管理をしやすくするための名づけとも言えるでしょう。

昨今、日本では子の健やかな成長を願って、できるだけ

美しい、プラスの意味の名前をつける傾向がありますが、本講座では世界の変った名づけの例も紹介されるなど、名づけの多様性、奥深さに触れるよい機会になりました。



みんな祖先の生まれ変わり
(コリヤークのトナカイ遊牧地にて)

(館長 呉人 恵)

講座

文化人類学研究における写真： ーチュコトカの資料より

2024.5.31(金)

講師：パナーコヴァ ヤロスラヴァ氏

(東北大学東北アジア研究センター客員准教授)

スロヴァキア科学アカデミー民族学・社会人類学研究所の上級研究員でもあるパナーコヴァ・ヤロスラヴァ氏の講座を開催しました。

文化人類学においては記録の媒体として長い間、写真が使用されてきました。講師は、文化人類学の調査写真は撮影者の意図で取捨選択されていますが、講師は写真にはもともと撮



パナーコヴァ講師と通訳中の呉人館長

影者の意図以外の「別側面」があり、それを見て分析する新しい映像人類学を紹介しています。被写体となった先住民の先住民族としての自己表現、またその人物がカメラを凝視する視線で示すアピール、一方、撮影者側から何うことが出来る先住民族への文明化の使命観などを汲み取り、写真の意義を分析するというもので、17の分析項目があると言います。

講師は自ら撮影してきた、あるいは現地で収集したロシア最東端のチュコトカ地域(チュクチ自治管区)ノーヴォエ・チャプリーノ村のチュクチ、ユピック(エスキモー)の写真の中から、証明書からはがした証明写真だけしかないチュクチの家族写真アルバム、新聞に載った新聞記事の母親の写真しかないチュクチの家族写真アルバム、唯一の祖父の写真に刺繍が施されているポートレートなどを使用して、写真から見えてくるチュクチの生活状況を説明しました。また、19世紀末から20世紀初頭に現地調査した民族学者・言語学者ウラジーミル・ボゴラズが撮影した調査写真、20世紀前半に活躍した民族学者アレクサンドル・フォルシュテインの調査写真、地元新聞記者のニコライ・ボプロフの報道写真を見ながら、写真が語る撮影者側の意図についても分析していただきました。

調査用の写真以外のルポルタージュ写真、先住民族が自ら残した家族写真なども分析対象とする新しい映像人類学の方法論は独特で、会場では講師の興味深い分析を聞くことが出来ました。

(学芸グループ 宮川 琢)

第39回特別展『アークティック・ステッチ、 北方民族の刺繍』

北方諸民族の衣服や道具類を彩ってきた刺繍をテーマに、
さまざまな刺繍製品とその文様や技術を紹介します。

会期：令和6年(2024年)7月13日(土)～10月20日(日)

会期中の休館日：10月7日(月)、15日(火)

会場：北海道立北方民族博物館特別展示室

観覧料：特別展 一般450円、65歳以上300円、高大生200円、

常設展・特別展のセット 一般800円、65歳以上300円、

大学生320円、高校生200円(7-8月)、高校生320円(9月～)

関連講座

◇講座 世界の刺繍

日時 7月21日(日)10:00-11:30

講師 春日一枝氏 (Bahar代表)

◇講座 ルーマニアの刺繍・工芸

日時 8月4日(日)13:30-15:00

◇講習会 イーラーショシュ

～ルーマニア・トランシルヴァニアの伝統刺繍～

日時 8月5日(月)9:15-12:15

講師 谷崎聖子氏 (伝統刺繍研究者)

◇解説 特別展解説講座

日時 9月8日(日)10:00-11:30

講師 笹倉いる美 (当館学芸主幹)

◇講習会 アイヌ刺繍「ブックカバー作り」

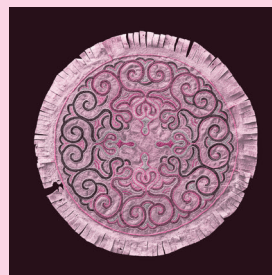
日時 9月13日(金)13:00-16:00

講師 西田香代子氏 (アイヌ文化伝承者)

◇講習会 ウイルタ刺繍

日時 10月6日(日)13:00-16:00

講師 ウイルタ刺繍サークルフレップ会会員



1938年 樺太オタス収集トナカイ皮刺繍 ウイルタ

INFORMATION

行事報告

◆4月7日(日)企画展「ユーコン・ファースト
ストーンションの伝統的アート様式」の
解説会がカナダの先住民アーティストU・
ヴァン カンペン氏により開催されました。



ヴァン カンペン講師

◆4月20日(土)～5月19日(日)、斜里町立
知床博物館・交流記念館ホールにて移動展
「文化財写真-北方民族の文化
多様性を伝える」を当館と斜里町立知
床博物館の共催で開催しました。また5
月11日(土)、同会場にて講座「文化財
写真-北方民族の文化多様性を伝える
ギャラリートーク」(講師：城野誠治 東
京文化財研究所専門職員、笹倉いる
美 当館学芸主幹)を行いました。



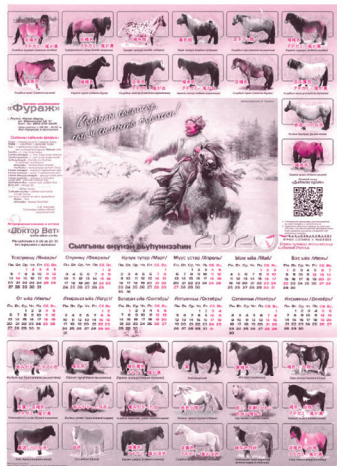
解説する城野講師

◆5月3日(金)～5日(日)GWイベントとして
「革のオリジナルキーホルダーづくり」を
子どもから大人までを対象に開催しました。



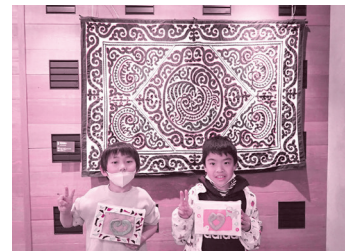
オリジナルのキーホルダー、完成です

◆4月27日(土)～5月19日(日)ロビー展
「ノーザンポスター&カレンダー」が開催さ
れ、当館に収蔵されている北方民族に関
係するポスターやカレンダーを展示しました。



展示物のロシア・サハ共和国のカレンダー

◆5月25日(土)、はくぶつかんクラブ
「北の文様ボックス」(講師：石原生久
代解説員)を開催しました。



グッジョブ!

職員の異動

[退職] 令和6年(2024年)3月31日

野口 泰弥 (学芸員)

塩谷 舞 (解説員)

[採用] 令和6年(2024年)4月1日

宮川 琢 (臨時学芸員)

北方民族博物館だより

No.133

令和6年(2024年)6月21日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会